

集中治療室（ICU）における終末期ケアに関する研究：看護師による看取りの質の評価と終末期ケアに関する困難感

著者	木下 里美
号	85
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医（看）第1号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00097210

(書式13)

氏 名	きのした さとみ 木下 里美
学 位 の 種 類	博士 (看護学)
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 9 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 2 項
学位論文題目	集中治療室 (ICU) における終末期ケアに関する研究：看護師 による看取りの質の評価と終末期ケアに関する困難感
論文審査委員	主査 教授 宮下 光令 教授 井上 彰 教授 久志本 成樹

論 文 内 容 要 旨

集中治療室 Intensive Care Unit(ICU)は、救命や回復を目的とする場所ではあるが、実際には、死を迎える患者がおり、看取りの質を保つことは、患者とその家族にとって重要なことである。海外では、ICU における看取りの質の評価が報告されているが、わが国では十分な報告はされていない。また、ICU は救命や回復を目的とする場所であることから、終末期ケアの環境を整えにくく、ICU 看護師は終末期ケアに関連した様々な困難を感じていることが報告されている。そこで今回、ICU での看取りの質を明らかにし、それに関連する要因を明らかにすること、また、ICU 看護師が抱える終末期ケアを行う上での困難と、それに関連する要因を明らかにすることで、わが国の ICU における看取りの質の向上に必要な要因を考察することとした。

研究の目的は、①ICU での看取りの質の評価尺度を作成する、②ICU 看護師の終末期ケア困難感尺度を作成する、③ICU での看取りの質の評価と関連要因を明らかにする、④ICU 看護師の終末期ケア困難感と関連要因を明らかにすることである。

ICU での看取りの質の評価尺度は、海外で広く使用されている ICU 版 Quality of Dying and Death (QODD)の日本語版を作成し、因子妥当性、内的一貫性、再調査信頼性の確認を行い、6 項目 2 ドメインとして確定し、「身体のコントロール」、「人としての尊厳」と命名した。ICU 看護師の終末期ケア困難感尺度 (DFINE) は、予備項目の検討、因子妥当性、内的一貫性、再調査信頼性の確認を行い、28 項目 5 ドメインの尺度として確定した。5 つのドメインは「終末期ケア環境を整えることへの困難感」「終末期ケア体制を整えることへの困難感」「終末期ケアに自信を持つことへの困難感」「終末期患者と家族のケアへの困難感」「治療優先から終末期ケアへ転換することへの困難感」と命名した。

2 つの尺度を使用し、全国の総合病院の ICU に勤務する看護師を対象とした調査を実施した。承諾が得られた 103 施設 2229 名の看護師に調査票を配布し、1595 名が回答し 1372 名が分析の対象となった。

その結果、ICU 看護師による看取りの質の評価は、平均 5.8 点/10 点であった。終末期ケア困難感では「終末期ケア環境を整えることへの困難感」がもっとも強く、その中で「死が避けられない場合、早く ICU を退室することが望ましい」と考える者が 65%と他の項目よりも多かった。看取りの質の評価との関連では、「家族が医師と終末期医療に関する要望について話し合っている」「終末期患者や家族のケアについて医師と話し合いや相談をしている」と思うほど「身体のコントロール」「人としての尊厳」とともに評価が高く、病棟の看取り人数が多いほど「人として

(書式13)

の尊厳」の評価が高かった。終末期ケア困難感との関連では、「延命治療の継続や停止の判断は医師が行うので看護師はその決定に関与できない」と思うことは、すべてのドメインでの困難感を強くしており、勤務経験年数や ICU 以外での終末期ケア経験の多さは「終末期ケアに自信を持つことへの困難感」を低くしていた。また、病棟ベッド数が多いほど、「終末期ケア体制を整えることへの困難感」が高く、病棟の看取り人数が多ほど「終末期ケア環境を整えることへの困難感」は低かった。更に、ICU 看護師の終末期ケア困難感が低いほど、看取りの質の「人としての尊厳」の評価は高かった。

以上の結果から、終末期医療に関する医師と家族の話し合いや、看護師と医師との相談体制の充実が看取りの質の評価を高める可能性が示唆された。また、看護師経験を積むことは、終末期ケアに自信を持つことにはつながる可能性があること、さらに、終末期医療での意思決定場面において、看護師が積極的に関わられるようにすることが、終末期ケアに関する困難感を軽減する可能性が示唆された。

今後、ICU における終末期医療への取り組みが変化しているわが国での現状を踏まえ、看取りの質の評価や終末期ケア困難感を縦断的に評価していくこと、また、遺族や他の医療従事者による看取りの質の評価と、それらに影響する要因を明らかにすることが課題である。

審 査 結 果 の 要 旨

博士論文題目 集中治療室（ICU）における終末期ケアに関する研究：
看護師による看取りの質の評価と終末期ケアに関する困難感

受付番号 15B-1 氏名 木下里美

集中治療室（ICU）における終末期ケアに関する研究は、海外では以前から研究が進んでいるものの、国内ではほとんどされて来なかった。木下里美氏はわが国における ICU 領域の終末期ケアの研究において実績を有する数少ない研究者である。

本研究は大きく2つのパートに分けることができる。第一のパートは ICU における看取りの質の評価に関するものである。ICU における看取りの質の評価はわが国ではほぼ全く研究されてこなかった。そこで本研究では、まず看取りの質を評価する尺度を作成した。評価者は看護師とし、評価方法は米国で開発された QODD（Quality of Dying and Death）尺度の看護師評価バージョンの日本語版を作成した。日本語版の作成にあたり文化的側面を考慮し慎重に項目を検討し、計量心理学的方法により信頼性・妥当性を検証した。これによってわが国で初めて ICU における看取りの質を評価するツールを得た。そして、QODD を用いて全国 103 施設に対するアンケート調査を行い、1372 人から回答を得た。この規模の調査は終末期ケアに限らずとも ICU 看護師に対する調査としては国内最大規模である。全国の看護師に対する QODD を用いた看取りの質の評価の結果、平均点は 10 点満点中 5.8 点であり、ICU における看取りには改善の余地があることが示された。看護師による評価が妥当であるかなど今後更なる検討が必要であるが、本研究は今後、わが国の ICU の看取りの質の評価の第一歩と位置付けられるであろう。

2つ目のパートは ICU 看護師の終末期ケアに関する困難感尺度の作成である。木下氏が以前から行ってきた研究の延長上にある研究であり、過去の成果をもとに ICU 看護師の終末期ケア困難感尺度（DFINE）を作成し、信頼性・妥当性の検証を行った。QODD と同じ全国調査にて DFINE を測定した結果、わが国の ICU 看護師の多くが終末期ケアに困難感を持っていることと、その内容が明らかになった。また、ICU 看護師の困難感は QODD で評価される看取りの質や看護師の勤務経験、ICU の病棟としての状況などとも関連した。

一連の結果はわが国で初めて全国の ICU の看取りの質や現場が抱える困難を看護師の視点から明らかにしたものであり、現状の問題点と今後の解決の糸口の示唆を与えるものである。よって、本論文は博士（看護学）の学位論文として合格と認める。

学力確認結果の要旨

審査委員出席のもとに、学力確認のための試問を行った結果、本人は医学に関する十分な学力と研究指導能力を有することを確認した。

なお、英学術論文に対する理解力から見て、外国語に対する学力も十分であることを認めた。